ＮＰＴ再検討会議・国連要請団に参加した年に

二〇〇五年十二月一日　久代安敏

◇　◇　◇

今年、「戦後六十年」という言葉が繰り返された。私もよく使った。

私の場合は、日南町の地方議員なので議場は勿論のこと、住民との対話のなかで、この節目の年にあの戦争、あの原爆、あの惨禍とどう向き合うのかについて語った。

例えば、議会では「憲法九条を守ってください、このままで」という請願に対して、時代に合わないから憲法を改正しようという議員と討論した。

「憲法九条は、世界の宝」…胸が熱くなる。

また、「小泉首相の靖国神社参拝は中止を」の請願に、英霊に御霊をまつり不戦の誓いをすることは当然だという議員と討論した。

「靖国問題は、日本の国内問題じゃない。先の大戦とどう向き合うかという国際問題だ、首相の行動が日本外交を危うくするだけ」…やや声も昂ぶった。

そして、「教育基本法を変えないで」の請願に、国を愛し伝統を重んじ家族を大切にする教育ができていないから青少年の事件が起きるという議員と討論した。

「いじめ、不登校、学級崩壊などの原因が、教其法や戦後の民主教育にあるのではなく、むしろその理念を生かしきれていないことに深刻な教育問題の本質がある」…子どもたちの顔が目に浮かぶ。

さて、こうして来年も再来年も果てしなく続くような気がしてならないことを議論している間に今年も終わろうとしている。

◇　◇　◇

非人道的な核兵器を使用したアメリカの責任が免罪されるわけではないが、「日本がポツダム宣言をもっと早く受諾していたら、広島・長崎の原爆投下はなかった」ということは、歴史が証明している。ただし、それでも東京大空襲や沖縄戦までは遡れない。ましてや日本人三百万、アジア諸国二千万人の犠牲者を生んだ太平洋戦争や、アジア諸国への侵略と植民地支配までは届かないのは明らかである。

だから、「あの戦争さえなかったら…」となるのだ。

◇　◇　◇

いま日本は、自衛隊をイラクに派兵している。戦う相手はいないのに、戦う相手をでっち上げ戦争をしようとしている。アメリカに尻をたたかれて、断れないので匍匐前進している。これほど非人道的な復興支援はない。

ほんとうにイラクの人々に歓迎される支援なら、なぜＮＨＫをはじめとする報道機関は、このことを連日放映しないのか。

かつての湾岸戦争やアフガニスタン戦争、そしてイラク戦争開戦の時の熱狂ぶりに比べてあまりにも国民に対して失礼ではないか。

自衛隊という軍隊には、戦う相手はいないからである。

武器を手にした軍人にイラク人との胸襟を開いて対話することなどできないから、ますます孤立せざるをえない。なのにイラク派兵を延長しようとしている小泉内閣が、世界の世論から孤立するのは自明の理。

◇　◇　◇

そんな年に開かれたＮＰＴ再検討会議が、五年前の会議より後退したと言われるのは、唯一の被爆国日本とアメリカが世界戦略のための再軍備・軍拡をすすめようとしていることと同心円である。だから私たちの運動は世界中どこでも草の根で続けなければならない。